TX713
.R96
1642
vol. 2
Rare BK
Coll

一 式三献乃事

二 梅干乃事

三 汁後熨汁乃事

四 三汁盃乃事

五 肉和乃事

六 腸熨乃事

七 御手付乃事

八 こふ橋栗乃事

九 熨汁乃事

十 饗膳乃事

十一 板盛乃事

十二 立喜乃事

寺子屋教科書
増補本文
盛岡藩

ゐれ國常立尊よりおこりて寅
ふたゝし天地ひらきましめて百
億の山をこゝ一ツを須弥山と名
付和ハ名まてなしとゆゑ下ハ
風まてまてをゐし須弥山を四ツ
まとめて東西南北と名付天
竺震旦吾朝三國皆南也四ツ
ま二ツ清山あり東に大勢山虎
口山是二ツ西に件山是一ツ南に
家鼻山馬頭山是二ツ北に御子
山麒麟山是二ツ中に尾民達
羅山是本山也

又

東鐵圍山　大鐵囲山

西持軸山　持雙山

北善見山　檐木山

如此者名付東山と南乃山谷

山同事ニ山のうちにはいてたと

名付ゑこゝあをて三界とは

四王天　多門天　持國天　増長天　廣目天　須弥乃四方

の守護神也

切利天　夜摩天　都率天

樂變化天　他化自在天

右欲界

梵衆天　梵輔天　大梵天
少光天　无量光天　極光天
少淨天　无量淨天　遍淨天
无雲天　福生天　廣果天
无煩天　无熱天　善現天
善見天　色究竟天

右色界

空无邊處天　色无邊處天
无所有處天　悲相天
非々相天

右无色界

三界毛成

水八ツまとめて九山をめぐる八
海に八大龍王座せ
雉陀龍王　跋雉陀龍王
婆竭羅龍王　和脩吉龍王
德叉迦龍王　阿那婆達多龍王
摩那斯龍王　優鉢羅龍王
おのく百千万億乃眷属を扶
々し須弥を守護なりまゐり
志ゐ・の三州に十六乃大國六百
乃中國十千の小國三千の粟
散國を見に人おせしと

第二　國狹槌尊

第三　豊斟渟尊

右三代之間者陰陽未分

第四　陽　陰　泥土煑尊　沙土煑命

第五　陽　陰　大戸道尊　大戸邊命

第六　陽　陰　面足尊　惶根命

右三代八陰陽二神八同時二神生

それとも未和合乃体なし

第七　陽　陰　伊弉諾尊　伊弉冊命

此神和合日神月神蛙子素盞

烏尊と卩御子四人活たれ志ゆう

是天神七代也人のことしめなり

第一　天照大御神

第二　正哉我勝焉

第三　瓊之杵尊

第四　火火出見焉

第五　鵜羽葺不合焉

是地神六代御神也須弥の四列
に四季を四季にして年成
せしはゆけとも四列の時かりしは
是は報慈乃三所也慈悲の女
にしあり慈悲と正直は神明に
て雨しまもと上は悲慈天悲々慈
下若名四ゆんさは風四ゆん

まてかくしをるくは天照大神
月神皇れはめくことにかくしをる
し是皆須弥山一ツの海法を
中といへとも右中百億の山河
同事は然ハ八大然ハ大海ハ
川のうゑ何まて人間にあく人
然ふなり其是臭ハあみまも狗
ゆもすれは也二望ハ家ハ文をも
定て人皆禽獸に同て三望
といへは伏羲神農黄帝三王
夏禹王殷湯王周文王是なり又
帝といへは少昊顓頊高辛

帝嚳高辛唐堯虞舜此時
代は父子さて爲るといへども志こ
と我志ゝ我半くはもれ又は
老爲る人なと我親ニ後
孔子おて三行ハ常をおこなふ
三行といひし是後の礼父子ハ
礼夫婦乃礼ハ常といひし仁義
禮智信是也故に志んをいはは
志そてうしいし四徳をあるゆん
式を爲ミ行の分爲ハ
は莫を想まて切るは伊弉諾

を鋪へ数を並形成りいて割料
理をとゝのへて文字八孔に附
よりの事也是三國に渡し
七御膳ハ神膳をもつて祝儀の肴
作もて上中のへんちんをとりて
饗膳ハ富貴延命子孫長
久の祝祷なり
一 式三献の事
海月菓子也食して萬菓の
中にくらけを食して境いつま
の菓を食しかる是より
て初献小用也

一　梅干の事

梅ハ素の物なり一花ひらを天下皆素也春の日永し老せば死せずと子花美木のはさなり是ゆゑ也

一　引渡のし去事

のしを八枚合て三十刀ほどを はりて十一色をあらへし八息延命の引渡なり通し但女房の法膳の八ほかみとも也右の引渡し和合をもて表して

一　三ツ盃乃事

日月宮の三光なり是よりも
堅く火をいみて冷酒なり

一　内外の事

鉦ハまうもんにのかりて位に至
るもいれまれ奥も分別の魂
なけれハ位に到るんもなし唯
それまくにて王国也然よう
ち男ハたのうは男引男ハ右ぬう
もみなりういたいたのひき
をとりてうち男の沙汰引男
沙汰なるへしあれこ男ハ一乃ひ

きの下より枝さしれひきまそ
なり枝さしの乱れとハきうし
云葉なり子まゐりの鰭と云
なり子守のひれより下ハ石だ
ゑみまそ別也又うちゐ子は清ゐ
てゐの妙法ゐ左ゑく肉外也
斗ゝく無し秘度也色波は清
いてその祝あり口傳ゐ入し
うちゑし引返し平面三角
かも何きに口傳ゐ二同如きに
清ゐて猶口傳ある無し

鰹の位に至るまゝハ心なるに変也
心ハ腹のまゝにて是にまゝにて
毎莫と名付て祝儀とす

一　御ほかけの事

御ほかけ乃御ゆまひ也 後に御莫
立し事ハ事なり

一　ふぐ橋栗の事

昆布ハ菓の海草乃中にまゝ
ひろく毎けるかきるを以て
祝儀とすれハ橋と云云
菓を以て祝儀とす又こうなん
せいと云ハ仙家にてひろいて食

して七百余歳をぬり是とれ
て祝とは称先揚と云を可
用なり

一 熨斗之事

伊弉諾伊弉諾尊より地神
五代以来此人のもとにはかたはあ
てあしはそし足ちくしてせ
いあるしその比乃人はもとを
まとなひてはしと名付ていせ乃
国に是をはらる是神秘なり
伊勢とは人平に丸力に生るなり
出ていと鍼是御木ゆしゆ

紙よの一ツ枚ハ七ツならへむかうニたゝみ
かさね一組の事なりかさねたち
右り九枚みツ又の一九枚みかん
あるいハかさね七ツの一ニむすぶ
らハちかつハ九ツかさねし組
ふ陣海陣よハ口傳有之御三
ツ重ハ右の通の色同しにいたし
候也

一 饗膳之事
鯛盛海足男鶏盛川足女鳥
山足男松笠里足女かや盛海
塩足男ニ川盛川水足女をつり

拘ちり是國士を表す然れ
ちりを國士は日本計也され
ば國男士女めしはこは飯是男
は食に帯三筋をへしおこれ
食の帯ハ右へまり是へかいて
さきトへ成る様よりへし他三
筋なから同とくを無し然ハ
女房は食の帯ハ左へ廻りして
下へかいてされの是へ成る様に
是三筋なし同とく無へし
一 枚盛之事
角盛二ツ八十六乃大國大百初

中國十子の小國无量の粟散
國を表せ也鞍大根なまれた
るへし是男雄女雄女爲め
とりまて其鄕食膳の爲と一法
ひのんぬるへしとも奥ハ
賢王法郎位ハ天人も下里
地神もうこき爲中の奥也
爲こふ学なり然よいもこみハ
九ようの里は表せ也食ハ雄
飯を枝なりにとるなり右の二
を飯と史婦なり何も法陽和
合の変也

一　立松之事

本郷食膳也　枚盛なり　立へき
なり　本郷食膳の松ハお松なり　枚
もりれ　其ハ女松なりしたんの事
無し　松ハ立へき　乃系ハ心もひ
てかく無し　心もひハおけまれ
乃心もひ八幡大菩薩とくもん
し　又其ハ多ハ青をれハ其日
大明神とくもんしてかけり
無き也　されハ八幡と其日明
神系と大にする也　而しまれ
松ハ手と色の説也

一　本饗膳　椙盛　是二膳

右条々陰陽和合れ祝いて神明よさしを富貴長久延命れ法条也三と与この法汁を乃飯

本饗膳杉盛を丸合し次戴いて我身のいまひ是なり然るれゆへかたけを法汁けのめの下に当面至色さ也又ツ同乃まけれめし是又本饗膳と杉盛の膳さら分てあまれいしひを到請め長久条昌れ法祈祷なり然るれゆまいりしあらき金

矣梶は白名乃沽湯なり沽饗
膳ありて亀のうさいろ八種
はくる拍ゆて又立はんはまし
神酒とはくし陰陽和合の祝
儀なれも廣き沽祝まて以
きは沽祝云数を加ふる事あり
無ゆへは但式三献ハなれくまで
へし庖丁なれくまで仕立也
口傳別なり後涯饗膳の沽湯
ハ白粥なりまた外ハ白名は沽の
也以きも白き亀矣梶まて
可集也

一 五節供乃事

正月一日元旦供の初也されし
日元年元月元旦元三なり然
に此かゝ尺紙祝ハ天照大神宮
とゝちて國去やみになり諸神宮
戸乃おに逐火と名れつゝとな
してなけき給ふ其時天照大
神宮戸をかひきき給人ハ國去の
やゝハとれよ多ク面白こ云ハ此時よ
里なり又同而度と云と是より
なりされし天照大神を年ゝ物
小一ゝ女に頂戴ゝ也此ゝ紙七八

三とあるすハ天神七代地神又
代日月星の三光を表してや
ぞこゆづりたハ天神七代ゆゑ地
神又代にはたらき地神又代ゆゑ
神武天皇にはたらきかゆゑ
くまゆづり葉成はしめを重れ
とするすも右のん紙いてもも
おなしくたらきのすゆ神あり
ハ紙也袖ゆゑあらめもみはん
ハゆゑくかゝくとしてはゝめて
角やもとゝゑとのゆゑひあり
門松ハよむしかハ一ハ角てあり

なりこと後二年立る事今の二年
大晦日に大宮ぬり清さて山里
ひとりに成をる老人ある家へ行
て宿代りあるし今さんゆゑ云
まのやみきも老人なりいさも
しく拘りひてやすくとうして
格ぐにもてなしをる十日斗逆
風をやうく天晴ゆゑも乃金を
れいやまず代こいて御ふんと云と
二三日逆風し給へ拘ゆゑもあき
なんこいへとも志さらに御ふんと
云ふひんに拘りひてまあ代薬て

寛政の慕こそ老仁にあらゆれ
はよ給こぶるまうきらるし此君の
法情中くやにかれりもなし
うのうへやうれ法勇志はかうじ
てもあまり阿り家は三面八ひの
風く神也もうこと見くは生身
多人入魔し我九万九億のきん
ぞくを天竺震旦にみぢんのこ
とくみちくあり我一人は同年
に後きんとんの事を皆一こに
れこうしみな家の道一とおもひ

亀て雪ゆきとまれハ帰ハ沢はさく
迄雪とけ来年より門の松を
二ツ亀てをかるへしとれをとる
亀に戸付春屋たにより也
て家来の家となるにきと大食
分ハ年ゆ始巳と始くら成めれ
とくいるにもあれく業立て鬼
ハうとへくさなりあり鬼やさ
やうの鬼たハ田方こくへにぎ
ちりて志ゆうぎゆるもあるべ
うにハ松ハ家が春屋たに二ツ
の松を志るへすて当穫を亀

ごゝ付子孫において行るゝも
んのまゝに為へし晩中とてを
まうごとくに失はける是より松
を二丈立を海之國皆同るゝも
又やいくしは我朝にして小野乃
堂と云者二生をしらるものも
此者宿分の朝必翳のしらに
ひらきをそへて我家の門に立
海を人みかまゝなびて乃事也
まんは志らに天竺にも唐にも
なしやいくしひら来れ海清は日

所國神なり七日の七草は
あるは大根芹なりなにこ屋
志海孫ゆき見なり唐國は神
農と申は菊の菜木をなめて
万れやまひをなけせしも毎
年正月七日のとしの刻は天な
里七種の菜ゆる御神農よく
くなめ見てひろめ給ひし
ゆへなり不老不死の菜也十
五日の粥は日月星の三光なり
餅は日神和は月神と表して
ゆとひとやさきのちゆうはてん
ぢくより唐國へ仏種御後に

あり宝れ高におかせて後まる
是は法ゐて唐国に白馬寺と
云寺ありかの寺に御ゐる仏弾
をハ左に玉志曲弾ハ右に玉殺
火成時左の仏弾ハやけを法志
やう志曲も右の志曲弾ハ屋けを
進た彼是長久繁昌也是皆
魔王隙尋をなほやいへとも仏
法さんにて神道繁冨なり
然志さ程ちゆうハ此心を以て名
付た義長ハくのしくしへき

ゆゑにいはひ来る事なり

一　三月三日

足志宕門まて綱をさけ志る儀

日蓋て通りを志く御山陰よ

を刈光ゆれに見んゆる為もて

これハ日比あたりとそあ而に

流ろ門出にしへまいハ河さま

みだれ数の数あきこあるし宿を

かくれともかれ人利ともせしや

らく未る婦をはましる未れハ

門ふく遊そ花も遊みまへかの

川島よ桃の花さうまて人あ

ゝ
ゝ
ゝ

ぬすびとはなはしけるに殺まじくきて
多くはむかしの紅梅あまた年
久敷も此里に植なる今そこへ
ともにもなぐさみける梅ある
歴々におもかげあれハむかしの紅梅
好る風子細をたづぬれば遠き我ま
かの子孫なるよそ是れまでて七代
の風さまた物に於くさ人ならで
ぬしも菅原の梅ハそれの流
るすが枝ざりかもしとや申をる折
其にて合ひとて是すぎれりちぞ
根葉ける三月三日在りて此あ

せんきうより頃く七百余さい
をふる今も三月三日にうゑれ
桃の花枝苔川になれ物なる是
て久しく志せばるもなり

一五月五日

神功皇后宮異國を御退治な
さるし然ははるぎ代表して
軒に志ゆうぬをなしべ忘とぎ
門をふさぐかうきやうへさうれ
ほのにあまり志ゆうぬ忘りぎに
付て吉例を天地開闢以後

…ありて結ぶ深くしてうれし心安く…

る代ぶりて今をめかしもそれなる

ば出ハ元すいの匂ひ志ゃうぶの

露深く出かくまてかも身

ふうらめましく思ふせめされ

ば志ゃう婦めりぎまて窓ば陽気

おらをめぐくば遊よ深くが宮

いほろひぬ天下太平それをとん

てあり

失火出見着鶴もろ紙奥まどう

き龍昼夜鶴にこ時の流

こうをやて龍耕海上にまんく

せきんしてみちひの玉をさきを
けるに異國のこゝろにあらひぬ日
本の長久に故なり粽は異國夷
法帛也むかしかうべを表して
まこもかたら来をはらみ物を
八重を表して八所むすひ周
ひ諸ぬ給ふ事雖法慈也

一　七月七日

天地ひらきを人おもひ而霧霜
宮の四つをなして一切草木同生
ぜれ以人生まれて物を織る

をかつし式ろ如まくなりまゝ後天
より星そちたるこもの紙織物
をる此星夫婦あり七夕彦星
是也此星此条なりさうかんハ
糸をかくごろ也からの上ハ此星
一年に一度ちぎる也江ハ川を
舟をこゝ河なり舟に付る加
ぢの葉紙杭ともなりとも
下天におゐて七月七日ハ未ゆ
土金水をあてとして志き高
さうきやうしき紙ぬきかして
仏生を織給ふ日也

一　九月九日

王川きん山と云菓の山あり九
月九日にかゝるゝ菓あなかれ
あるて川きん山とゝなんやうきん
乃百百里や百里なり南川の
中に一筋菓あありこの菓あ
を汲人ハとも二百歳ゝ又ハ三
百余歳までもたり川とも也ち
ゆうと云老ハ菓あをのみて
之百余歳をゝぬりなり菓ハ細
家にて不老不死乃菓也天地
の初にはしてしきばあれ

右庖丁巻第一魂見言曰

金剛界　伊舎那天　焔魔天
　　帝釈天　羅刹天
　　火天　水天
　　風天　地天
胎蔵界　毘沙門天　日天
　　梵天　月天　守護所

四條家　傳受

菌部新清厨
吉田五右清厨
堂紀和泉守

羽田神右門尉

高橋推兵衛尉

寛永十九年　高橋又左衛門尉

五月廿一日

中村十右衛門殿

一 石ゑゐ乃事
二 刀之事
三 一當万世為之事
四 久即兄寒
五 筋乃事
六 胎蔵界
七 五佛之事
八 四生之事
九 十二因孫之事
十 八苦
十一 有為轉変
十二 海之部

十三鳥之部

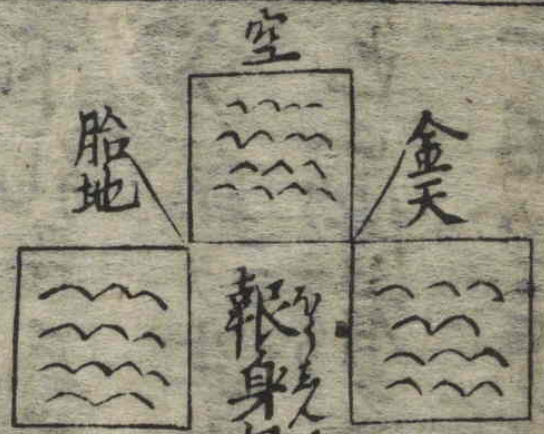
十四雉子ヲ解事

紀葉

平好氏

孔子三行五常ノ後庖丁新理盛
物ヲ定ム陰陽和合ノ義ヲ以テ川ヨリ
沙汰ス然ニ鯉ノ鱗一通ニ三十六ナ
ラヘリ是ニツイテ三十六平ヲ先トス悉
皆佛法也妙經二十八品コレ金胎
ノ二法ニ同一代ノ御經六タンニ御說
法也是ヲ三十六ニ記ス金剛界ヲ
表シ片身下胎藏界ヲ表シ兩身
下孔子三世ヲシレリ鯉モサレテ三十
六ノ鱗ヲ生シ目前ニ至古來賞翫
也口傳有之

一石々三ノ事



法身如来　法界ノミン　大日

報身如来　智恵ノミン　釋迦

應身如来　慈悲ノミン　阿弥陀

右三身ノ如来无作ノミン

天地ニ時節アリ有為轉變也刹ヲ以テ謹ヲミル刻ニテ時ヲミル時ニテ日ヲミル日ヲ以テ月ヲミル月ニテ年ヲミル年ヲ以テ刹減ヲミルヲ六十一年ニ年一ツ減ミテ一空ト云也

丁之事一也

一刀之事

虞舜ノ御代ニ水中ヨリ鯉刀ヲノミカケテサシ出タリ此刀ハ名モ无ク柄モナシ面三當一万世為裡ニ色即是空空即是色ト有此八ノ字ノ心ヲ以テ先キ八寸ニシノギヲ立皆丸峯也柄ヲ鯉口ニツクル也此故也孔子末世ヲ条シテ只刀ヲ八寸ニ定ラルヽ刀ノ大小ハ刧減ニ付テ次第々也猶口傳アリ

一一當万世為之事

一當ハサトリ也

一万世為ハ法界ノ衆生悪ヲナシ善ヲモナス遊カク遊フヲナスヿモ即身成佛タルベシ

一色即是空空即是色事

月西山ニ入給ハ日東山ニ出給フ散花アレバサク花モアリ法界何レナフニヤ

一筋之事

孔子以前ハ筋ノ大小定ヱシサレ氏妙經二十八品ヲ以テ一寸ヲ一品ニ表

又然ルニ天神六代ニ五佛御出世

ナレ氏妙末夕無明也孔子却減ヲ
ハカリ末世ヲ祭シテ筋ノタケ一尺
八分ニ定給フハ
一胎蔵界ノ八百余尊ヲ以ナリサレハ
一分一佛一尺百佛ナリ然ルニ八分ヲ
以テ八百余尊ト観念也平形四
寸ニケツリ四寸ノ中ニ二十八刻ハ
少絶二十八品也平形四寸ハ四天
王也或ハ胎蔵界ヲ観念シ或妙
經二十八品ヲ寸ニ表シ寸ヲ刻ニ表
スヲ平形ト号二十八品ニ八巻
ヲ入刻三十六モ有ヘシ

一五佛之事

一ツ二ハ　毘婆尸佛

二ツ八　尸棄佛

三ツ二ハ　毘舍浮佛

四ツ二ハ　拘留孫佛

五ツ二ハ　拘那舍佛　已上

一四生之事

胎　ハラゴミ

卵　ツブコ

湿　ウルヲイ

化　バケル

右此外生物ナレ

一十二因縁之事

一無明

出入ノ息ヨリ母ノ腹ノ中ニテ一滴ノ露ノ始タトヘハ上中ニ草ノ種ハアリナガラ其ヒ見ヘヌヲ云ナリ

二行

日数行ニ随テノスカタ也

三色

其ノ躰ハ大形アリテ未心ハナシ

四名色

眼耳鼻舌身意尽クタイス

トイヘハ上モ未母ノ腹ノ中ニアル也

五六入

六根スミヤカニ胎内ヲ出タルナリ

六六觸

ヤニフレナレハシメナリ

七受　ウクル

八愛　リヤウナウ

九ゑ　トル

十有生

十一老

十二死　已上

一八苦之事

生老病死

愛別離苦
求不德苦
怨增聽苦
五蘊咸苦　已上
一　有為轉變之事
木火土金水
木水　火水　土水　金水
一　海之部
實相ムロノ大海ハ方便ノアミニモレ
ス切モ切ラルヽ奠モ皆成佛也佛
法サカリニテ神代繁昌也現受
無比樂後生清淨土也隨而庖丁

ノ平前種々ニ扱ヒ又ハタトヘハ繪ニ
書花ノ如シ真ハ真如實相也抑
伊弉諾伊弉冊ノ尊御鉾ヲ
下界ヘヲロシ大海ヲサガシ給フハ下
界迄化御タメ也其時御鉾ヨ
リ一滴ノ露ヲチ淡路嶋コレ也此ノ
嶋ニ降化メ國土ヲ守護シ給フ故
ニ路ヲ玉ボコト名付作ト云云又海中
ヲサカシ給ヘハ御鉾ツイテ奥一ツ
アガリゲル鼈ナリ則庖丁ナシテ又
海中ニ入レ給ヘハ一切衆生ノタメ也日
本開闢ノ奥ナ六陽魚此名付給

其時意波シキリニヒカツテヨリタル
魚ヲエイランアルニ定カニ首尾ノ見ヘ
サレハ海月ト名付給フ又ヒカルヲ月ト
号海月ト書シ陰魚氏名付乾庖
丁ノ始ナリ海月料理ノ始也右神
道ニテ孔子是秘シ筆ツタシ給也

一 鳥之部

霍水鳥左右ノ羽ヨリ庖丁ノ事
陰陽和合ノ義也空ヘ立羽ヲ陽ト
シ地ヘヲリヌル羽ヲ陰ト号羽ニ羽ブシ
ヲ重ルヲ和合ト表スカシラク骨三ツ
ヲ三身如来ト観念ス法界ノシン

サマ〳〵其カギリナシ何レカアタナランヤ
サレ𪜈先ツ五穀成就第一也然レハ
首ラク骨三ツニ左右ノ羽ヲタテ〳〵五
穀成就タルヘシム子ノ四刀ハ十方佛
土中唯有一乘法無二亦無三除
佛方便説佛平等説如一味雨
随衆生性所受不同此文ヲ以テ也
但庖丁観念是アリ
一雉ヲ足ヨリ解事天智天皇ノ
御代ヨリ也唐國ノ日記ハ大カタ濤
水鳥同前ノヤウニ作也但サキヤウ

二毛解キ作也足ヨリサクフ八日本
記二作也　已上

右四條家之秘傳堅秘々

菌部新兵衛
吉田五右衛門尉
菌部和泉守
羽田神右衛門尉
高橋権兵衛尉

北

上段床中三幅一對　梅　元
雉　中央　すく
竹　花　そのうろ

[illegible]きも床乃内きのうう　金

金鳥　紙にて一書

金鯛

二重

二重

南

着金　又文
うちくり
下に作橋三本

下東（ひし）

こまんちう　何きも金銀花多く

あつりもの

きんなん

こしひ

きりこ

こさし　（きゝる）（魚豆）

一八月瓶さゝ叶ま蓮葉（かうらい）の蒸

ゆかこ　きゝく

こおけ

そきゝ　さあのあゝき切金のもあり

んりん

うすゝ　金銀

ノや

式三 南大

くらけ
清水打

三ツ盃 きづき　若の者 たい

あるみやこに口傳 くちん
おとこ女に猿口傳 くちん

むめかり
梅下
清水打

二

青
清水打

清水打くらしき 朝

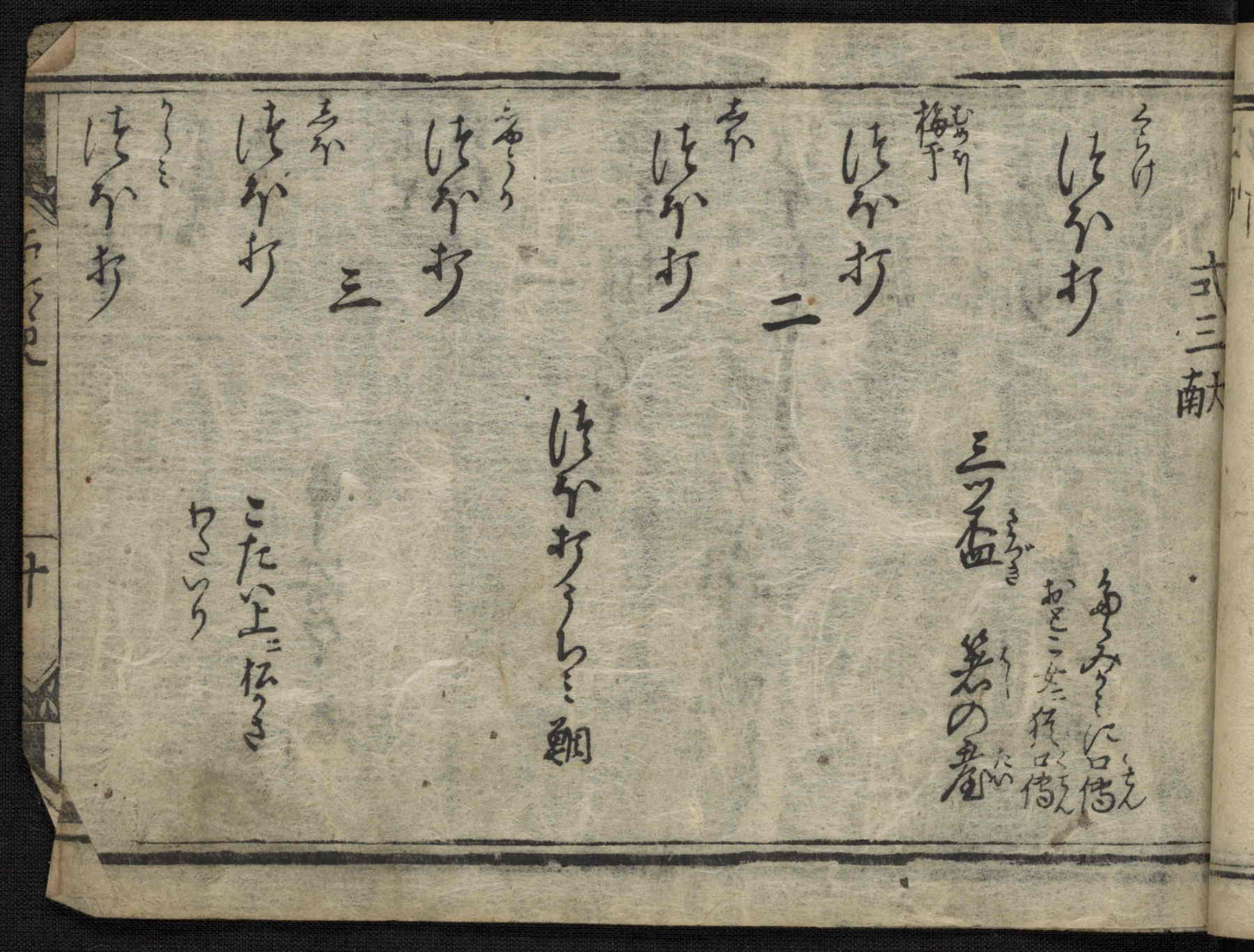
あかり
清水打

三

青
清水打

こたい上に松かき
わるいり

うしき
清水打



与

亀甲ニ

鳥

亀甲ニ

又稜音

二

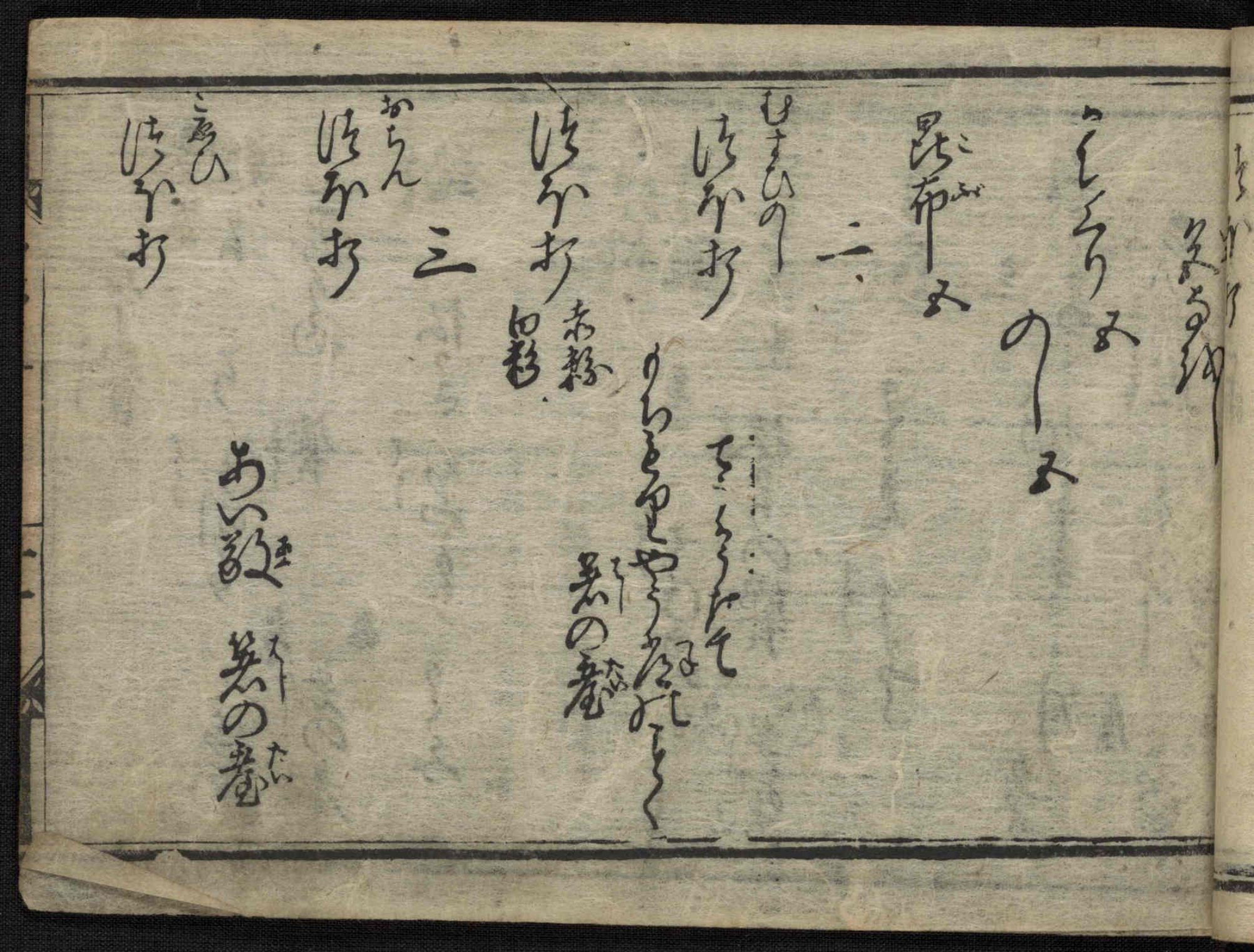
清水打

清水打あんにん

三

清水打

あるのあん病



[illegible]

[illegible]

[illegible]

二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本饗

ふ文の糸

鯛りり とり うのりり てしい

まづり拘 饗 鳥 蒸の耆

鼈 松かさ あやり かくみ

二

ふ文の糸

りと鹽 鳥 ちひ奠

なまつを 松りの饗 鳥 蒸の耆

りと鹽 いもこ尺 すかつ

三

きまるめ ゆうしろ 汁 あつめ

しひ私鹽 まけのめし 上ニ ごりのこツ 鳥 蒸の耆

うらまみ　志ゆう　汁ひたり

亀甲ぬくし　露　松四方

亀　剣　又又

御門　七又三

法祿さの盃

せきれいの巻　よき

てしかなんもかなし

三ケ日

二ツ刃　あしまき　ちとまるめ　ちとり

りん

三ツ刃　あひ　志ゆう

あまのり　（こゝ田ゟ　志てこ　金のより）

さめぬこ丸なり

御饗膳五本立之次第

十二合のたて物

うき
くらげ
ひらたけ
くるみ
あわび
たこ

此外飾花是あり
何も組のたて物也
何にても時の物次第可用

ありあけ松のおきな
そのうふくらげ
いのちあまたやし
ふたいく
ほやさのさしく

二重

瓶子　壱對

右よおん

重盛　銚子

二重

提

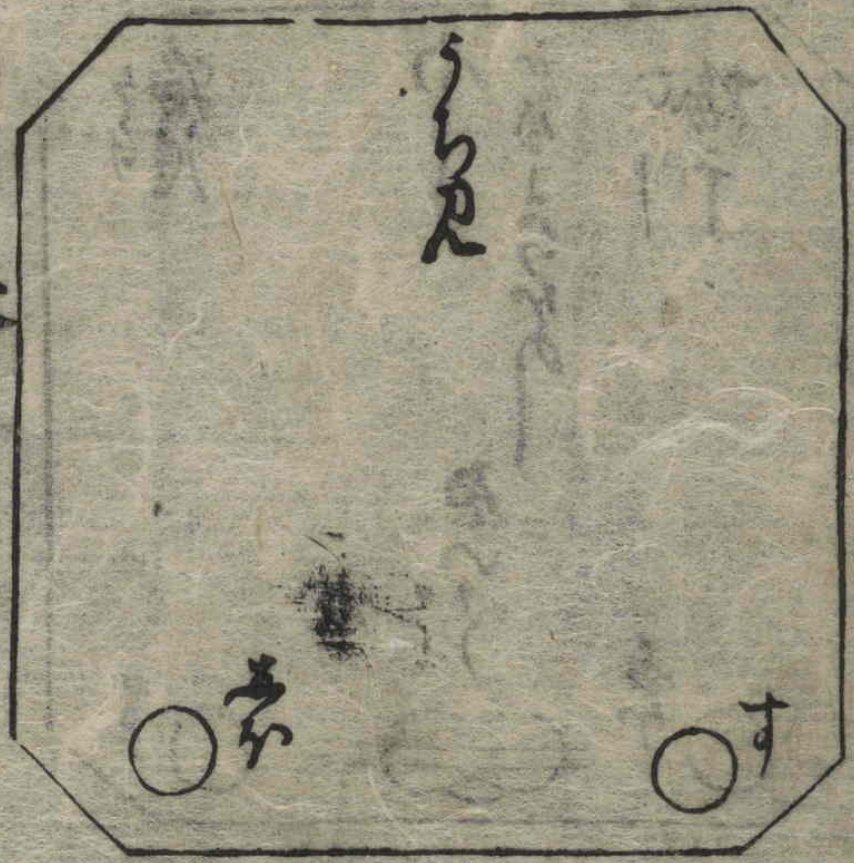
重盛

すたこ
ひらり
かうじ
梓

右ハ床のかきりぬ

式三献

二献



三献

御箸（たり）の御

御箸をめす

紙は成のはい
はしかけとし

御本饗膳組之次第四方に松生乃
松糸もしき

鯛（たい）もり　鳥　あげ盛（もり）

削物（けつり）　本饗　作糸（つくりあ）　作鶴（つくりつ）

麺盛（まぐきもり）　松かさ　あや盛（もり）

御二

角盤（かくはん）　とり　たゝ美

なまもと　枝盛之饗（すきもりの）　作[illegible]　作[illegible]

角盤（えんきり）　いもこ　もうぶ

右本饗枝成之饗（すきもりの）は四方ニ桐生（あいとい）の枝とゑつるも但いとはしぐさあぎまれなる
むまひ御法（きさ）可也

塩引（かひき）　志ろか

くさみ甲盛（かり）　こいの汁（しる）かけ乃めし

酒（さゝ）びて　からまた

鯉（こい）

右三本立の時は房まで衆乃法湯法制
て稀は陰陽のめしまでおしも別三の膳
まけのめしと用ゆ也汁かけのめしまた乃
めしは猪口傳あるべし

御与

削掛　掛ける

もくき

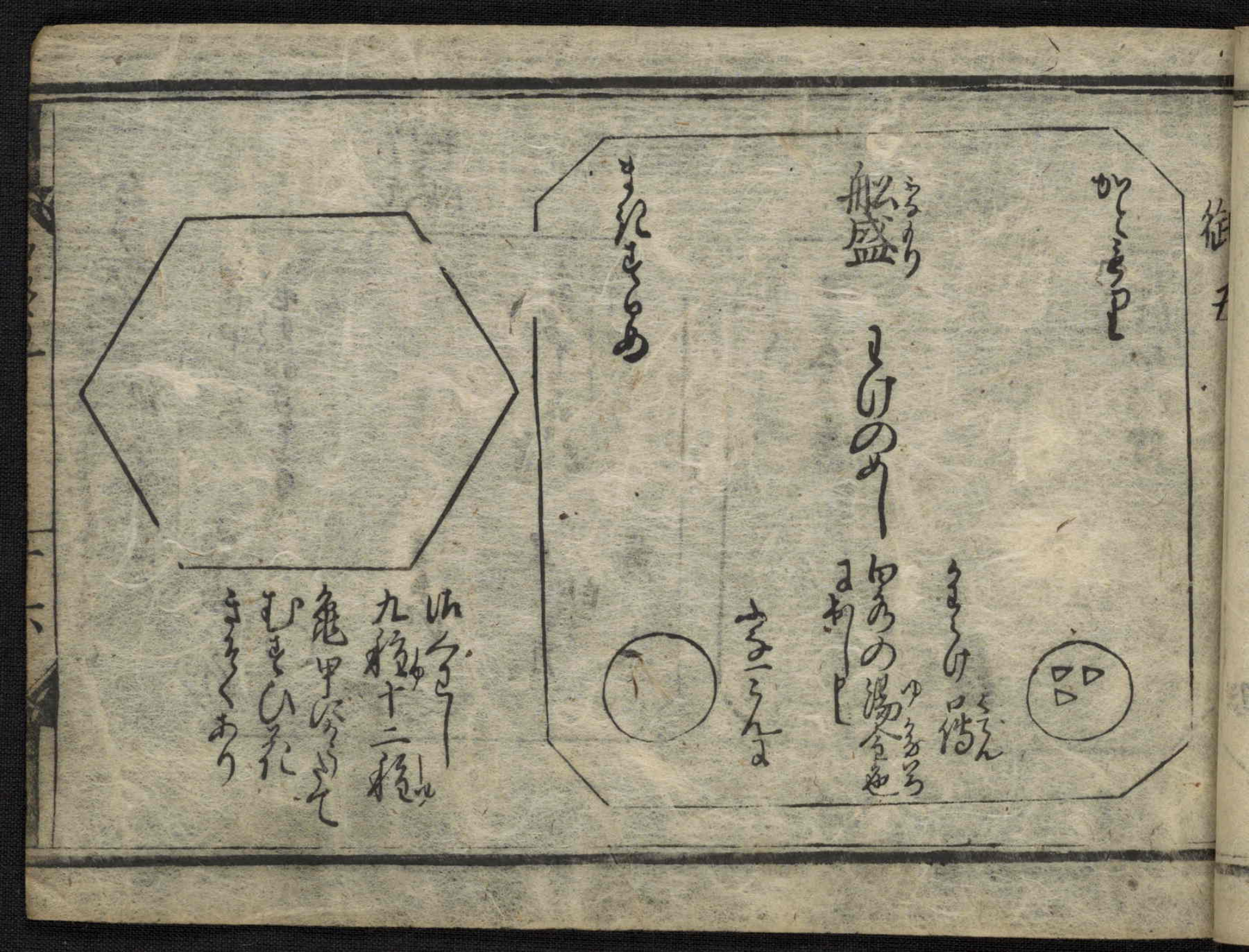
ひさ

亀足（きくく）

ひさ契の汗絶り

ひさ

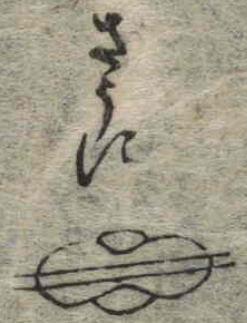
ひぞう亀　久あり



おさんの盃 一ツうまくまきよくしは 但三方四方

物献

亀甲に亀
亀足かうてあ
さらに
亀甲に五稜
引廻あり
黒 青
白
黄 赤



一献

こゝ引廻
青 赤
清水の地

南代ハ其頃よりの紙をのうにハ式三献条
は法久世なきさうらに法門替法膳おし紙のらに
もふ昔は先より全乃所を可然者也

三献

さしミ 鯢

法々の相

あの相

まぐぎにす

○

[illegible]

[illegible]

[illegible]

昆布

三ツ盃

おさんのかはらを二ツ相ゆる也　但右同前

初献

もちひのてうかたて三ツ

赤粉
白粉

右同

右同
餅

一献

こぐく切目の地
小四ツ

ほぐの地

鮎鮓

二献

こゝ切月の拍
川廻五

はぐの拍

[illegible]

二

たこ　　ゑひ　　汁 鱈

うさめ　亀足（きさ）

くゝひ　　きし　　汁 鯛

三

酒びて　削物　汁蕎

れし　龜足

おぢん　いり　汁鯉

与

やきる

こゝろ

かしこ

清吉殿

清吉

初献

鳥 亀足

ざるに

ひしが

尺ほ巻

文雅者 ぶり柏

二献

こくさしこ

ひしがり

す

じいきまく

赤

二ん大南

こさし亀足
こうくに
あの柄
ちぬぐり亀足

五ん大南

志び
こうへ
ひけさしし
志めきすゆう
ちくらす

与献

はそ〻釣揚やき 亀足金銀

右四條家秘傳也

麁乃寸法 并 二重若壺 共

一三 面一尺四寸 土居 一尺

三与 面一尺三寸五分

五 面一尺三寸

汁次盆

一上乃亀の甲広さ五寸五分
ふちの高さ一寸九分
一下乃だいの押て広さ八寸二分
ふちの高さ八分
一下乃だいの押て径一尺二寸
ふちの高さ八分ほどの台けいハ六
かくみ入れやうた可よし
一上乃盤わりの幅あり右の縁ら塗
のをうしろ ぶこふハあんのさ極也

二重

一下乃だいの面の口底さ八寸二分ぬら
のゝ高さ八寸
一下乃かハ高さ二寸二分同下ぬたい面乃
口八寸二分ぬらの高さ八分同かハ乃
高さ四寸二分
一下のたい乃面ぬ口九寸あらの高さ
二寸二分
一下乃產の面ぬ口一尺二寸あら高さ
八分同下の足乃高さ一寸九分付様
十文字右のあらは雲形のまとり
其中のかハよハ和乃さ面也

一沛くるし亀のかゝ口八寸高さ三寸

本饗乃揚

一高さ五寸上乃いるゝ五寸下乃せく

さ三寸三分

沖鳥乃耆

一面長さ一尺二寸同横一尺かゝの高さ三

寸雲形乃そうし是同足の高さ四

寸八分

沖鯉乃耆

一長さ二尺三寸奥成よかゝ乃高さ三寸

八分但そこ一寸七分さげ也

親子乃耆

一也さ二尺五寸横一尺八寸

式三献乃巻

一壹尺二寸又八一寸まても加へう絶様

よ沙汰足角

一あらの内三寸三分足乃えさ一寸家

亀の甲

一面乃底さ三寸五分ぬらぬるさ三寸

十二合乃打

一口八寸足八三ツ面をあり組たい壁

丁文字但六かう乃時八九寸

新家渡物

一番水二ニ火三ニ牛馬四ニ賊宝五ニ鍋釜六ニ米七ニ

家也八ニ鼓具九ニ小兒十具足十一酒

十二主人

右四條家秘傳書也

菌部新兵湯尉

吉田五右湯尉

菌部和泉守

牧田神右湯尉

高橋権兵湯尉

高橋五右湯尉

寛永十九年

午 五月廿一日

中 村十右湯尉

一産所十二之事

十二いん忌んをひかうまで

玉明行文名色六入

六觸受愛取有生老死

同提三ツ是ハ三世ひかうまで也

一蝶方乃事

天竺まうご國に杜康といふものあり

この者目にはくうをそなへて居

といのゝある時行の林の都より鶯

まゐるに鳥一つがい龍来はくうを

くまへ行の切にあくまへ合れハ雨

霧和合して酒に成きれども人

元をしるべ蝶ともおまえ花こそ
て行乃林よみらくたり杜康姉
んして行の林乃中へよけいりてく
りくこれを酒なり元より酒をつ
くるを也此山前ハ清る事なく
て本になりたる酒をのこまると也
とも天竺唐國ハ酒乃如木ぬあり
とも云字ハ多寫と書
もなりてもしかしまそくらを清
むもこのゆへなり

一 銚子乃恵ハ清きおいる事も法
湯和合とひらしてもこのかハ
日中月神とひらし三光とく

日神尾神とのたまし三者もなく
けん神んまて罪我はさくしなく
いたんハあやまりたる世のなり
一てうし乃忌我はつゐて一世の
あり屋世のさとに忌ゐ嫌ゑ嫌ゑと申
神まし御まを也鴨乃明神のおく
のゐんなり春地弁支天也てう
し乃忌を嫌みおとしゐる神なり
芝禁中まて乃事也江戸八番
まてまし御世ともこの四人九十歳よ
はり給ふなり此法不可用也
乃也てうし嫌ゑなりかまらはて忌

ぬきの宮とゝ也

兩身下之尾立鯉

一尾をたゞるゝ天をまつる是慈悲智の二ツ也

長斤身下之鯉

鯉門よのぼりんこぶるといへとも凡魚にして理せきしんと心のなるは斤身といふ也なんいのれ口はしてさるはなるれなり

魑立之鯉

一我ひれをうまはれ無八二ツをも

はといふ[illegible]

ておりゐしのひれとりゐ

元服之難

一我徳人より見れば君は事四恩又常と専よりゐる様なり

移造之難

一毎歳二寄ゐりといへども六根にゐ

なりたん四ゐをよく分て親念を

石ゐて六根と表して我知を部

卒の四十九院と親念は口偽なく

ハ本て知之

海道之難

一已と奥して六天より八葉の蓮
花に到る也

あ身下之魚體之鯉

一今まで八ヶ〳〵のとこのまゝ也これ
とも八ヶ八巻の庵丁釈念にて
則身成佛

八十嶋諸乃鯉

一かゝる乃江に八十の嶋あり此を城
乃水なり王上桁に御遊なり波の
嶋に黒一ツ皆まゝしまて網を
ほりとゝあるにおとこ舟より上りて
まゝ家の邊に清水乃あるに鯉二
ツ洗て庵丁をあれとゝ切られ也

みるふせばそぎ肩とつき肩切て
鍋よいりしと一ツ乃鯉ハ肩洗ぬ三
枚よお洗し八ツよ切て鶏よ洗ひ
并ひ男も私ならあらて鯉なと
板よのせて筋刀をあらて庖丁
するもとこれハさまるくて筋を
去てもつくにして右おなし
く切るも周伯牛毛を刀てかり
孔子よ鎔る孔子さてハ早好まて
我洗ひする鯉ハ洗鯉と名付次
乃鯉ハ泉と名付八十鴻鯉ハ和

兄弟まで庖丁ハ為し一ツを取れ
鯉とも名付之八十鴻とも名付給
なり鄰の男ハ給ひなるハ所を切
と名付らるゝ何も庖丁一手なり
但上より下へ手を取くるし下より上
へ取へ或ハ中までとき合洗手不
同まなゝ婦ハ庖丁不知のおと
りも折く御者の婦なれハ八十
鴻清と知る

お陣之鯉

一鱗がゝ紙さまひてこゝ海に切て鳴
ひ様のとくちゝして御陣と号

一高月が原に神とゝ御なりしとは
何乃社頭ぞや先天照大神宮を
まそまつり八十八葉の蓮花を座
して善衆生をゝゐまを始ふ
なりとせう後く法人のひれうしたさ
いるまそを森林にして尾を直
よしく正直と号八百萬乃神
まそましませハ何と社頭ハ其小
なり

二鯉

一毎月下門身下同姐まるゝ人弱
蜜親念有之

御前庵丁之鯉

一もとゞれ骨を立て治前と号也
二つなもおされたる

片身下之尾立鯉

一尾を角つゝ天を条也天金地
胎なり天地一体乃就也

片身下之魚躰乃事

一汝ハ元魚にして中ハ紀性あり
角ハ天の帝ハちくをもいし
て卵ハ袋ハ袋をいてこうを
もてはやいふなんりんあり心務

小鯉

一夫三身如来とこれハ一万事ニよう紀り
なしたる紙乃葉ハ底して用ひ
隠て彼中をし松の葉ハ細して
千年を姫ノ鯉乃大小ニよらず紙
性あり故尾ニ三刀うてゝ首玉也

後来之鯉

一三十六乃初年両身下後年如庵
丁元也仍ニ後来号ニ庵丁之
七ヶ日ニ前尾を板の面ニ三七ヶ
日乃口傳ニ之

聟丁嫁取之鯉

一いさるれいさるみ乃爲陰陽和合
して男女乃たゝひをまつし給ふは
おいて彼庖丁なれ鞄中天女成
仏經に云天なくして雨ぬられ地
無して万木をいせ女人ハ仏種と
説給君も居も如此子孫繁昌

庇之難

一法人乃ひれ心なるみうけさいて
皆一和にして八十道の後なり
そめ乃やうにまくべてひさし名付
雪乃朝之難

祝之難

一八ケ年を徳重為四ヶ年横まわりて元
四天王を表さとらかへし引かへし
乃身はひのしくしてあるべし尺
にて有石をなぞ尽芥子をれ
尽てもかばりとはかぎら乃無祝也

初雪之難

一雪ハ如のこ雨ぞこゝにてそれ神かれ
有し命ハ霜露乃とく滅て二度
不敵即身成仏也

懸之難

一諸人のひれを四つにして柳楊松
楓也八ヶ八人なりからの鯉紀子
乃自紀まてなし唐國まて月見
の鯉は紀智一二三十六は元を入
て渡まるも

馬場之鯉

一七尾乃狐は化して后と成あまの
さへ聖人を殺化のあらはれて鐵の
縄まて指く四は入て渡く元も化
して失て自なにさて又化して
女と成むまへ元也終元もあら
まれてなれ聖の事へあまぎ[illegible]

せらるゝ弓馬乃たるまゝて可湯
の鯉を作り長久乃鯉丸誓てこ
後口傳ハ此庵丁也日本記也

看庵丁之鯉

一見星を觀念して一切衆生酒忘
んにハとんぢんち乃三毒なし
さらてんせらるゝ別分如仏也

袴着之鯉

一三行ハ常をもつぱら守記也

鱗煮之筒切鯉

一鱗を用て庵丁成事ハ仏の惡

なし鯉の本ごとにはしらつことなし
故に鱗煮さ名付也

二唯鯉

一三ツ鯉ハ四條家の秘傳也夫人に
前の時二ツ鯉を切り置ゝ後なる
二唯鯉をさゝしてた鯉に替へて
二唯鯉をへられなりや又目本の
記なり

右三ケ条ハ孔子の目記にてなし
口傳なくハその由ぎれあるべき也

四季之鯉

風乱海花氷上雪

魚敬馬圍眞蘆玉藻

已上三十六之鯉 但片身両身之鯉ハ別紙ニ記ス

右四条家秘傳也

菌部新蔵尉

吉田又右衛門尉

芝部和泉守

羽田神右衛門尉

高橋権蔵尉

寛永十九年

午ノ五月廿一日 高橋又右衛門尉

中村十右衛門殿

貴人まハ太刀弓よ浴ひうや金
ぞろ事太刀をぞたのるに
をこしよこ多へてもくどく
玉物(きもの)なり同馬(むま)ハくらをさる
なりひき多ておりてそうり
此同にハきへし又よ浴ひとバお
りひとき人のもうへむけて可
玉弓(ゆこ)をハたにたて玉ぶし同
うやをハ右乃ゝに立て可玉
一よ浴ひとりちておるにハたを
立ひと出貢(しやうくりん)蛻なりされも一人
志てりちておる事本紙(ぎんぎ)也

其時ハ相りさあひ二人して申
さて可お同りふせをも上も
なく物也

一ゆゑとも自ほめにゝを人まお
もたハ結をよく多くりてなの
辛ま持右ゆまてハ志ニ落を
持て相りてを人書りふへいて
も物也こけとりやうハと紀に
よりてふつまふ無しのせハ人
まこせ申おほふにあふきかんな
りをなしたも無ておもと物也

こなる所へ出けてみもる物也

一左乃ゆへまゝ物ハ弓からうさ
むりぞ紀ゝ所 芝おや也

一右へまゝ物ハむちゆるぎ矢さ
所志こゝぶらゝ所也同さら
やうハ時ふらりてぬるまふへし
変許ハせひのうさりなり

一弓を人まゝ物ハまゝ右にから
て人乃弓をへいこと物と弓の
もち所ハ亦さらぬ志さ四文寸金
て右の軒にかりた乃年ふへも

とる弓の上を捨て人の弓(ゆん)でれ

くる人おし(いざ)ありあるとはゆくに

伝(でん)ま(かう)を

一 弦(つゆる)をはおもとる手の内を能く後也

弓おし事あるも矢(や)をそへく

おもと(?)し

弓座(ざ)に木あとをおしよりそ

見るあれば弓かさへをはず

さそのぶりの中のひゆひるゆぶち

的球を落ひさなくとも遠るべし

づておし通し又ふきちりきとど

一ふぎり[illegible]

[illegible]事略紙(アやくざ)也又ふぎりまれ
たるゝ弓ふけるかけざる事ヨ
やくざし同たるゝ弓に矢(や)を
そへさるゝ事も略義(アもんぎ)也

一ちげしたる弓をよそへけるに
ふぎり七八寸上のけるゝ紙みよ
ヨまて一むもびむすび弓此方
まてひもむもぶどくむもふ
物也

一むちを人ゆるゆるもむちされ
をみ六寸斗至(とき)て右の手に

持(もち)てたの衣(て)紙也ら此中なとに
かき人の右のかゝへはうをおほえ
一ゆゞけを人におほゆゝいをとたくり
て掛うきの中へ置て右のゆゞけ
を上にかさしてたをゝい紙人乃
かゝへいたる也
一矢(や)を人におほゆゝらつきのかし
乃画んを右のてにかゝらてた乃
平まて空又寸上紙持て人の
右のかゝへおもと
一ゑりなをおほゆゝ結(お)をあらうて
のかゝへおしえてた乃平ゝなり

て人のまゝ後ハ右乃ゆゑそく
自然ゝ此無人を持て人の後
くるゝとくおほ也

一くるを人にみせ申又おほにハ前
ハのゝ人右乃てを入て志りて此
方へ左の手を入て持ておほ也
此目にかく後ハ此ハ人ニ紙表人
のまへむきくをくへし同請
死後ハ両やうに知るゝし

一おふきをみせ申事右をみせ後
ゆゑ中紙也打やうハ今同こみ乃
左にあし志ゝさ紙を右にあ也

てもの掛て美人のまへに至時ハ
何こみを美人乃方へむきて
至爾し又一そくに目にかけり時
ハ美人の右ゆるのあぶミをかわ
しよせておきて可(かへるべし)ゆる何ゆ
をミせ中にハひけてともちて
此目にかくべし又ゆるに時もひつ
てをゆるに同平(たづか)緩おしかけ
至時ハよくこひもまてかこみて
右ゆ掛て何ゆのゆる紙右ゆ平
にまへく可おほし

もちてれいてとつきてわたし
請取やう人ハ女の手まて出す
ゆうんしてうけとれハ法也
の事なり
一太刀折かミ請取渡しハ太刀
をたいのまゝにおきて柄をとりて
太刀をまいらすへし折紙ハ
あるくのたるかく可わしきを
とり柄ハ右のひさ紙立てくさ渡
柄もとを取柄ハひさの立居う
おくさまを下にゝりて渡すなり

無し

一太刀乃あしの下に折かけを置て
ちゝ人の上をまたに置てそうしや
よおほゆるゆゑくるなるも也

一披露（ひろう）の太刀なるしハの下に
折紙（おりかミ）をしるして夫人乃前に
ハなるも也そうしてそうしやハ
平衡なるにおもを抱し一ちり
くるゝ人太刀折かけ紙おもにハ
太刀とを禮式（まいしき）のとくおこそ
とにへし置やうハ御口傳（くでん）也

一太刀さち物をさるがくにおほゆる

うきたるさる物を作るかくれたる
乃またらしてやみ下
一猿楽(さゝぐ)にさる物さほハひる婦く
に入てわてさる物をらそ入て
さ乃へうきて一作るかくにさる物
わきてにハうてあるはなるハ之拭く
小やうなりまそて久さずなハ
域まへうるね物しやくさる拘乃
請代ハ二百匁之れハ二ツの附也
一ツにハ百匁也
一對面(たいめん)乃附ひろうる刀乃事去人

のたれ前四五寸ばかりのまてとく
とくおく抱也これハ志ゆうりん
の後し同さらたる抱ハ太刀を
ハとくやうにハおかれまた玉抱
也弟一乃ひしなり
一自分（おん）太刀をおれまハ人のとく
とくもちゐておもしこれ此
時ハ平つきにハいたさぬ抱也あるか
ほとみあらしかいてやくなり
へし一太刀をかいたる事刀
を下ま太刀を上にひとりまた

[illegible]

ゑりぬのようまでおりてへるす
て人の右れ手へぬけ紙おもしに付
是乃時も同おし

一刀をよこ人ぬけふへき事小刀を
さす拇也ぬうれぬき所に口傳(くでんあり)也

一小刀を人にあはにハ右の手に持
てたゝ乃たけ事ゆび指にぬけを
無そむけのうちをあはせ同ぬ
様の人にハ右れ手に持てくぬれ
方をさしあはせ又ちこ若(まつ)衆
とにハ礼よれやうに右の手にて

ゐて おもて物し同ゝ紀ざしかゝひ
れ流るゝふ定也女屋(ぢう)小物なれど
里塚るゝ右の辛まてれとこれ
物したるひものといふともこれ
ゐていふ物し同女屋(にようぢう)れさうつこ
をいたきそ口をあて御物し
ゐれゐたそのほうづくと座(ざ)
数(しき)まて おもてるゝひせ川の縁し
物(そうじ)くよえんをとまてハおもて物
なり去局(さあひさ)九ゐくゑんをがし
よ上川ハ具足(ぐそく)いたさんなめなり

一 [illegible]
ぎりのきさにもちてともとまる物
也同人の礼を時はまこにもちた
所時はそふるなしたてにもち
さる時はまこにるをまた物しまる
るまもありそれ時は太刀を供奉
奉小頼ケ可金物也砂紙もちて
人前へ取る事折紙と下に金
てまる右の所へ取るのをもて
扱まぐまれ物をとりてたれか
たまあをのまにをきて同すき
をのりしにまる人しまうの字

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一ちうしんのかたきをうちてこれをとる

一二文にてはいはるゝ物あふぎさぎをと
小刀(こうたかれら)は書(あ)二一ツにてはいはるゝ物
筆にて後とやれを三ケ此ゑん
と立申しさぶの鍋(おむき)をいとんた
んよこゝろへ事也

一さる物とハ茶のさる物此也(さうめう)
板(いた)の物にて物くあれいこゝ事物り物
むらさきめしてこはいはるゝに
そでとハ一むぎるゞとあいまて
うめこゝろ紙いふるり

一あるせこハ四月朔日ゟ四之乃事

一かたびらとは五月五日ゟ下の事
これをハそめてこびらなし
一七月七日よりかたびらハ白衣(しやゑ)と
て白きこびらなり也同よのこゝびら
ハ何そめれかゝ記らかし調(ことゝ)をそへ
ていふ所し一金一枚と人よか
時ハかみそてはゝ上ハ右の字(じ)を
かきて右ハ掛し同二枚一枚の時
ハはゝまゝ掛也文物よ入やうハ
一つの時ハるくぬるゝ二つれ
時ハ上にもちくて重掛し一ひ

たとへバされを人の衣へるゝ
くゝりもと袖也
一 楊人草花などに付るゝ中さく
むすびよする袖也
一 座敷小縁を云所事ちうそん
よせかけるもよくうけて椽下へ
さがるなり図とれの所をされ
やくゆゑかくてられ附ゑぶ
なりひろぎてうけへしたゞ
右図前也一ともゞ紙海ゆるの
右の平がりちて人よまれ附ハ

夜風雨にていふもまぐに立て
おほなりえぐさ風をバ人のうる
へむきへし

一ちうがくまたなをまる事をしし
時ハ和をほうまぬなり

一かなまのまへ中九事上座（見）
を一ツな成まへしわしの三ツ
ゑ時ハ二ツ面へ無具物也

一かうろを手にまへて人を流さに
二ツ乃わしをたの　をたゆひま
まへて人の人おほへし国人

を語る物也何ぞ其の時も取
皇れ紀つく無し常に語く
事尺苦あるす

一いろりに火ぞし乃盃やうにらま
て加こぎのきたに無て盃といへ
つこ武士まなてハ下ざにたそ
をく物也とやりこはんしつけ
の後おとぞこにたる紙をべし
これもしるへき仕付のもちし

一炭をくぶる事してしまてハ何
くしく皇ぶる也武士まてハ何

もおく抽し又ほみをはくさは
と可云ふ事なくこ吉し

一 ほみは火を盃るまゝ冬（ふゆ）は長火
を中に盃てよ程も同秋（あきあつ）夜火
をよに盃画きて又女（にようぐうまつ）屋の前
ハ火をしまてくるし又のこいを
みはり年をてくぬる抽し

一 いうそく八上座二ゝやうなど
なれ抽しこんをとなるまいどう
ほうれ役なり又誰（たに）人もとりて
くるしかくもこんの乱ゆるし
角（たうざ）座はいたどうなかしにとなる

事ハ仕付なり又多ハ

無ゆうまでいへ事も難うこれ

しゆるる事第一の仕付也

一めしかけさきに菜(ちや)をすいてもる

事本家(あるけ)にきいまわ無るるし

一本家をよぶに志せ用といて

よ給て一人をよぶにハ頼めしタ

めしといふるすいとぎ居るし夕

然しの名字(じ)を入ていて可

結也

一人中まで物をくふる事一ツ相て

里ゆいふ物にくう物也夫人(さにん)のも

まへしに三ヶ条ましくもまいらせ候御事一
しつかにまいらせ候
こ年始の御祝儀申上まいらせ候御沙汰
殊に御めてたくそんしまいらせ候
しかしこの間御参り候へく候
なを御ゆるりとまいらせ候
ゆへしかしこ御挨拶の御返事一
ことに御座候まゝ御めてたく
うちくれ〳〵御申上まいらせ候
申しまいらせ候へく候

くらぬ物なり

一二の汁ハ乃ちまそさいとゆゑ也

一貴人の前まそ二の汁あり一ツを
ならぶ物ハて喰也本膳
足付の時ハ飯ハもんぞりお
ろしてくふ物也

一鷲ハ鳥をくう事ひさ紙な
をしてゆひ也てまゐくう事
本紙なり

一このもとくふるゆめしをくひて
てくらにをけをくを物とされも
ゆこるぞ礼小くきるくまぢる

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 白鳥のゆでかた又がんのあたし
ハぢをとりたくらう物と同ゆで
かたの事ゆうくりん

一 もし二もかいがん同し又鴨あし
鳥などハ一あし二もがいまもしと

一 喰魚さ抱さいるまなまれ切同
の抱それ外ひよれものとよく
くしやうくりんもべし

一 こぐしの色れ雑よくてべさるす
あらすまさそくまんくの抱
くう魚ならば

一中腸のやき物汁かけて吟味物也
これハこりあをてくらへし吟味
もなしめしに汁かけてくう也
くうこと
一素麺(さうめん)よハ湯漬(ゆづけ)などしひやしん
汁のミとりもちしをあさく
豆て吟味し又さしまへ吟よ
早くハ始(はじめ)て切目あるいハ物
あそこらかハくう也く汁目に
のせんかあもたる姫あそし
是をとくしてうんまんし

一さいたんをうゑ候事二度ハう
ゑ候事三とハうゑ候ゑ候ゑ候
さのゑめし見苦敷なり
一貴人の来をとうゑる時ハこゝ
ハ物をくうへうと其をはらへて
ねる物なり
一汁のさいたん此時ハまれ通ゑ候
毎くうゑ同汁をくゑ候ハ却脇
をくゑる也
一めしをまくゑ候事寺までハかき
りんまゝけべし武士方までハ
打敷の中へまくる也
一粥のくいゑうとておよなしされ

一 ほうしゅうの
ものをかりて
ものをかりて
一 ものをかりて
ものをかりて
一 ものをかりて
ものをかりて
一 ものをかりて
ものをかりて

小出てやうそうのまゝそうし
を丸てたゞ乃ほ丸まんちうをう
思し則笠とハ扇を持る後
とくもちてゐる物しこれも始
より汁をハとハ作る物したとひ
もうこもくいてそがこにまゝ也
鉢あんまゝ丸おちらぬやうに
唅なり人のちまそくうるゝん
くるしきるゝ也
一むしむさのくいやう右のうゝ丸
たのをおへる後してまあとへ

あきたるせいろうとる様もくし
曲んだうハ女房の所などへハ
ツまもりておし合くすいもく
し哈やうハ始ち若まてなう
曲れなり

一もいものハ汁をもいてのちにみ
をくう曲し志ぜん一こんのう
なるぞハひまのおちをくう
うをくしてくふ曲ゝ以同
志ゆしのもいものハ汁をもいも
くぬなり

一いのこれ餅はたうりくぶされて

目より高く毎年まで[illegible]

一くりを来らせはるす人のたは
歪也何にてもくりしらかれた
ぐいはたは歪抽也さらばきの麁
ハ右は歪へし

一茶を来らせはるすたのまて
麁を持右のまにて天目に
入てさいらせ抽也

一尺八を浚せるす人の吹まれやう
小浚也同笛ハ多口を吹ことを
浚せるといふなり

一大清ゞミ小皷大皷なりこまかれ

物ハ手むきたれおほやおやうなさ
毎まられ

一 襦(たつ毎)乃裁(さ)やうたの是(あし)とされり
入てさへしぬく附も同なあり
さもとい人の中まて裁(さう)も多う
ふハくるしかるもとしまち下れ
志まハれをされまもろ事ハ後と

一 私(まさし)ハ人をこまふまハ名字(こやうじ)と官途(くんど)
を可喚(よぶべしまさしさまん)私共人の所前へ居るま
ハ殺(こゝ)をさして可おや人よふ附も
ちゆく可答(こゝまへし)

一 桃子(てうし)乃乳後様(こうまさしすう)あるもあれ

一 飛子ハ飛後様あるものなり
ひてさらへしされともあるへし
て人の後しかやうに始る可請
乱

一 夫人に飛子をまゐらせはよいまた
まゐ乱ことく出柄の方と可乱
是ならハ不定様乃相模同なし

一 夫人を乱酒を清くるゆゑ物
など此盃ハ八分計かまらきの時
も七分計に酒同なさ風も
ちろう酒乃時ハたくかしてて結
一 酒のさげきにまくる乱をふかせ
公事一行言なり無る面ハ

うぶりて姉の紀と以ふ分女と遊之

一酒壺二ツ舌二ツ咽は携く活
く條あり其後ハ氣根盛ん
盛ん、のやうなく一ツ節て二ツ
の時ハそこされをぬるすひきう
此事也

一砂の丸やう銚子紙銭刀札法の
乃ごとくに稽古くこまかにしてかくハ
ゑるも清くよ見ゆれやうに座敷
をもさもにまるきごとく分毎こ
の孫あまふまねやうふしてよし

[illegible]

見て掛(さて)客(さゝや)の前へ上り沽(さうつき)置を
くなり時(むぎ)宜(ぎ)を時ハ客(さゝや)れなふ
置を盃也自(あるじ)人のおよハ年よ
もちて礼をさせしなり

一置掛(ちつ)ハ銚子の口もと二四寸
のきて各こふしよ掛(ちつ)掛(ちつ)されし
とも貴人の請(うけ)ゝる置をさて
めゝものよれまも時ハ銚子よ
里上に置を掛物なり其一の
仕付也一銚子の上に盃を盃
なりハ附(ちつ)なよりの後也

一鏡を前へなをすにハ寸一尺計畳二
帖目まて贈物あり太刀も座敷
まてハかりとも手をとほくへし
家のくゝる人参てもとらるゝ物也
一膳を上ゐるより座敷のまへ
指のあたりくにおもくされ
もこまれの門遠く畳に繻くに
指さきめていかにも座敷をすらう
ふみてはんてい主人の前よ
てたのひさを出てまた添
衣のひさをつきそ添へいよ手を

かゝの人ハ花のひさぐらをつ
きてまへ面し三ツも同じ
る也又膳をまへくかさまん
ぜんをおしよせて通へし
一三乃汁ハ其人のおかても行
ひざ代にくるゆ法縁し三の
汁ハ右れひざをはく物し是
ハひしなり又川物ハひさを女
ま(一度まにさてまゆ物し
一膳をあらう事川物を座敷下
へのきてなぜんよりあぐ物也
其後ハ次才くあげはなり同

女房ちごなとハ二の汁ゟ見
しるといへり活お家を家を汁
よりあくることも也

一肴をもさみ辛外中へおく物ハ
梅干又ちつちや透頂香を
外汁あるものにハ手ぬくがに
玉物也同切目ある物ハ
類ハ指入されに可玉也

一肴をこゝ所にハ右の辛にうくる
物なり同左に請るゝハ軍
陣に限りさるゝ也又ムいやう

抱なくはいくうものくくはいちう
しろ事略儀(ぎ)なり去間見れ
かくいてよれりのをもさらて
おれ抱也

一食(じきろう)藤を人の前へおもれは夫
人乃左の方に可盃足(あしつけ)付に居
てれ事に著(ちし)は足付の中に可
盃ふくを乳るすそこれにあを
盃かくれさくふの人よりてあを
へし又毎といふくを乳(ちう)とも
我が右の方にこれむけて可
盃かくるをれ抱と立て精を

一さんにさは無いうとしたるよんん
ちんにかきなしたる事也
一扇(あふぎ)を又明(かい)と云るよねきさし
のまい一ツひろまてかりてを
くしたるよ一ツ村(むらさめ)の時にかくべ
ようづき一ツ柄を入て人にかれ
一ツ風をとろるよ一ツこれをかり
て又明と名付なり同せんを
と云事也
一ちんざうはの多いハ汁のを
しかるぬ平(てぶ)をくく時ハ
たのひざ紙付て右のひざ紙

立面し同手拭を付て右肩
よかけ面し時によりて衣巾
なれ時はかゝらぬのほよ乃引
あてゝ手紙ぬくりせゝ掛る女房
はほのをかけ掛也

一きんぬん乃ゆゆゆゆひを立
としたりふこしらへかみをよ
くゆひてあふぎにあてゝ包
丁ゆて方よきべしさて忌が
しをきせゝ物なり

一めしあにあかるゆ礼はせぬ掛也
面時は礼をきべし同さけの

ミやうゐるゝ

へむきて虚とよれ程よのむ
抱ちにおまにふ[illegible]
時見ぐるしきや又くうやうハ
暗よらるへし

一 金丞へ橋をはふ面きる事
女房中かゝへハさられをまげ
書へし又常の事はたる紙ま
川書面し

一 瓶子の口ほむる事右ハ女蝶
左ハ男蝶又のまへハ初をにハ
左右の年までかゝえて初後

抱なり

一 奥を板に居て人のおへおほは
ハ海奥ハ腹を人の方へなし川
奥ハせなを人の方へむきて
おとを抱也同りし蔵の物やうハ
人の方へむきへしらいさき
奥ハかしら我人の方へむくも
のなり板をうくハ頭かく人黄
敷なり

一 鶏魅ハ祝儀事どにハ頭かハざ

一 内抱と一年抱とて嫌儀也

一 鷲鳥たかりしはとたかりて
なてたの年にハ鳥乃足ハ魚

一鷲鳥たかかしはとたのまて
持てたの平にハ鳥乃見ハ鱠
んを持ておのゝ代来ると
御かむ後なり又柄にもゆゝ時
ハ鳥かいの方を向へる代をしし
何そ此等れんは行要の者也
一洒水の書やうなるにハ洒の字
をしざる柄也同さうれ柄にハ
洒の字入てゝものを
一鯛十枚鮒十枚鯉十こん何ぞ
名奥ハもん乃字を入て平柄也
又海のうなもちいされハ何十
なん百と平物なり

鴈一ツ鶉一羽鳥一數又鴨一
羽鶉一掉といふハ七ツ乃事
ありまでもさむるゆゑ也
云後之門　板書以上百卅一ケ條

小笠原刑部恙反

俎之事

一大板長さ四尺三寸もぐの底さ
二尺又寸厚さ三寸足廿長さ

二寸六分ゝて四寸三分厚さ
二寸六分足の付やう前末口
ゝ量等入又そしゝり一寸八分
入る也
一中板長さ三尺三寸ゝて一尺
八寸厚さ二寸六分又足の長さ
三寸六分ゝて等二分あつさ
二寸二分あり又足の付前
こゝちより等そしゝ量一寸
五分也
一小板長さ二尺七寸ゝての廣さ
一尺七寸あつさ二寸五分又足

刀の柄乃事

一 小きほうの本を用ゆる也 拙本
をもちゆるゆゑ努こ無之
金宣長さ用ゆるあかより
九寸 然れみハ八寸と可 然也
一 包丁鞘ハ一寸八分四方と
一 鞘乃志ゆくのゆゑ
但めよりを下ぬきんとさざめて
二尺六寸より上を大鞘と申
なり 一尺八寸 二尺五寸 是を
中鞘と申也 其尺七寸より下
を小鞘と申也

献立之次第

初えん引後

かちくり

一のし三酒清き

こふ

二

きくく

一小くし　　ほうす

一さうふ　　もし

一うちもみ

三

一かくてうり　一ひきの物　すし

一はやすもし

右三こん乃次第

七五三乃次第

本膳

一志る引　一くめ　一やきもの　さしみ

一あゑませ　めし　一すし　さゝく

一かうの物　一小おきて　一かまぼこ

二乃膳

一ゑこ　一まし　あけめ汁
さくく
一ゑし　たい汁
一うらすゑ　一くらけ
三乃膳
一もりゑ
一さしミす　一鶏汁
一ふなりり
しうごたより
一あいさゆう
一きゝ抱あり

一もし　一もむ

きさく　みしり

一あまもとう　一たい汁

一ゑこ　一おけ

三乃脇

一もりもし

きさく

一あまひ　一白鳥の汁

一ふなりり

一菓子

一五三二乃第

一小膳

一もし　一やき物

一汁

一なまもと　手志

そし

一食

一かうの物　きさく　海がこ

三乃膳

一楠

一ゆとに　たい汁

ぎゝく

一ふし

二乃脂

一とり

一さしミす

くさし

鳫汁

以上

寛永拾五年

刀

霜月吉日

卯月十一日之晩

此引後

一からくり

一熨斗

此三ツさらつき

一こぶ

二献

一かめ乃かう

うたて

うわひ

此さうに

からも

いりこ

くるつかお

一かめのかう

三献

安紙

一さい

一まつり物

笠

ひれの物

ひれもい物

あこ三れ次第御本膳（りんぜん）

一たこ

一やきもの（きゝく）

あつめ

いて

たこん

いりこ

ふき

一あしませ

はもしらいらけ

しか

一竹のこふしめて
一やきうどん
ちりか
一いり
一ふまて
一ふかひ
ちりか
御くるし又程
一まんちう　やもし
一屋うん　一食うき
一えぐこうき　一こぶ
梅表　はぐさ

九月廿日

あれ川　たこ　ノ後ばこ

あへませ　にゆづけてしれ

うしのたい

かうろ物　姉めおけ

二

まれもろめ　そぎ物

あもびいまもり　汁あけめ

はるにあがじふ

汁

ふらげ　うらすき

二

たいきれ

あびふみもり　汁

ひしかの

青ぎこうの也　汁

もいりの　ひれのこの

えさかれ

もみのし

かうすこ

かけのこ

御ひさん

おゆこ清をなすもの　汁　清こへ　こなすび　いも　青ゆ　たこん

小さのまて　こうらい　めし

二

えいかい　せりやき
あこ壱ぞうがず　ふとくかさあ
ぬかみびらし　ゆてこう　なまび
大きさやきたいらぎ　ゆて　たい　こうり　ろ魚ぶび
ひ物　やき玄だけ
うらの物　たかしにて　まんのうらへ
一二ツがし
一三ツがし
一ちうらぬだい
一さいしさのだい
ぬらぶぬりくりし

小柑よりもせんを入　めし

二

あゆのこ　あゆ　まけなべ

ひやき　あかび　なくい　くるぶかな

汁　さといも　たくん　ちくふ　かれ　あぶこ

柑びさたい　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

小もの　さけ　もらこ

三

さしみ　こい　いり酒　やまとかき　ふ　ふ　ん　な

汁　たくま　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ

牛ほり柑　まるめ　いりこ　ひぐら　大でら

かんゆでとり　まめふ
やきとり　けり　こも　さゝらめ
うまばさ　あさもく
ひとり　ぢい
かさめ
いせ志び
ぬりやきて
ぬきいなし
糸ぐるし
くぞ屋きもら
くぬきもら
ごまもら
のらくるし

板やき　がんの出でたり　汁こいこ
たいの　魚き　たて　まあ
向結
もしこれ　笹ぶび　うまぶび　たこ
たきあぶび　うしやき
又結
こたい　やきて
引面
屋さ鳥　さば　まぶ
魚がこ　まひ乃
ふるこぶ里　さるたいこ
ひもの　ふもの
うんやき　さいい

十月廿一日之発

びいどろ 二

酒びて　たい　あかび　うね　ひき　えん

とまのうぐとら　汁　ほうま　いそう　吉さけ　さ点　なみ切

二　あを行のわき　ふらの内金　あしつけて　めし

こいとめ　なっかりも　汁　あんう

ゆけ金　なみ　あをあ

二　枝の二角　ぬいたうし　汁　こぶこ

人とく　ふなゆきて　く稀んぞのうふ

屋さことり ひだら こも

同 ふそこさあまひ まろさら

同 うまばこ

同 なまひたい

同 かうの物

更 もいりやき

たら ぐぎめ

同 後頃 ごせん

今 たい

ことらせんぞ

汁 も たん こだう さふ いりこ

うぢやさ　さうな
ゆでとう　まさびあへ（たい もげ）
いるもの乃　さでい
まぎやさ　ゑび
もくしやき　ゑ（ゑ）あかひ
こい乃あるも　なすびだんご
さすごやきて　こいのてんく
かうのもの乃　えんせうみそ
ふと煮（に）　このまこ
くまし　鯣（すあ）
くぢら餅
さたうぐあんご

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

剃夏宿三人上座四拾六人

ぜんぜん
牛膳　足打

大皇張　小角張　ぶち
とこさ物　屋さ物　汁　厚　根ぶち　大ん

小皇張
もむ　絵庵

いせ志び

なまず　大ん　もし　笑

大ちら張
かうの物　蒲絳　小角張　りし　絵庵

二

小ぢら張　いぢら張　絵庵
物ゝ　薄盛　汁　たい　三角

楠 幸螺

小角貼

蛸

三

小角貼

楠分 漢里

汁 ひや汁

綺麗

うらけ

海明 ゑうぶす

足ゑ貼

羽盛 小角貼

引而

屋き 木皇のあしうち

煮牛房 足打

もい物

小鮒（こぶな）　ふくさみそ

はりな　二条　生姜（ちうだこ）

紅や　抱きんん　痛んだたこん

くりし

まんちう　絮（いり）かや

くるく　こうん

掃き　うち柴

やしひ

逐鳥（ちだう）

朝鮮信使上洛之時兵庫七五三
献立

引渡三方　長熨斗
昆布
揚栗

御本膳　信使二人金屋之膳
上官二人良屋膳

塩引　人ちう金　物銀
紙の置金
焚物　小角　金
桶　物銀

脇　人ちう金　物銀
大土器金
食湯漬　物銀
茶　塩金土器
笠金
耳土器

人ちう金　物銀
きしく金　小角　こちう金　物銀
かうの物
蒲鉾　金
ぬくめ

二

大ちう金 物語 大ちう金 物語 大土器金 あけめ

蛸 鷹盛 汁

大こん 牛房 鞆 乗海鼠 串鮑 足腐

きさく金 物語 辛螺

大ちう金 物語 大ちう金 物語

りうすすき 鰤 汁 鯛 ひれ付

三

きさく金 物語 貝盛

小角金 す五器 大ちう 物語

楊弟 鯉 金 汁 切鳥 平茸

あかな金 小角金

鴨羽盛

御 菓子

まんちう こうん おかり 軒 蒸 ぼりうき やひ

金 強高 同二方 ぞて あ 意 いりや

御膳膳

染付平皿

膾 料理 牛房 汁 食蔚法椀

生鮭 平皿

[illegible]

[illegible]

蒸物 鮎 鮨 土器 汁食

二

貝炙 生貝 赤貝 栗 胡桃 黒胡麻

前烏 御汁 鯛

敢物 菜ヲ芥子敢ニ

三

大皿

[illegible]

汁 甘苦 栗 [illegible] 炙海鼠

引為

かうの物　名を蔣絃名君

炙物　小鯛大皿かけけに

炙鳥　雉　足打に紙かつき

車忌び　足打にかつき

めんめく

袖ぬり　雉みを大皿

もい物　鯛かくさみを　八寸に葉せて

蔣絃挽

盃巻　金太郎　切蒲鉾　豆腐

金箱に　肴入　蛸　ありのこ

漢鳥　金併

御菓子　獨高金　まんちう　打ち　むきひ

こうに　こうん　あまてと　のし

まて　やうん　ゑるこ　いうぐや

以上

寛　十八　十一　廿七日

寛永十九年

五月廿三日　高橋五右衛門尉

中村十右衛門殿

村上

ISSEIDO
誠
東京 神田